U35

U-35委員会企画
AAJ U35 EXHIBITION
2026.03.18 - 2026.03.22

■AAJ U35 EXHIBITION
3/18（水）～3/22（日）11：00～18：00
FabCafe Kyoto
展覧会：来場者 222名
■トークイベント：3/21（土）17：00～19：00
ゲスト　阿部俊彦氏、山口敬太氏、的場理氏、西口健太郎氏
モデレーター　木下浩佑氏
U-35委員会　大屋泰輝（リーダー）、市川雅也（サブリーダー）、倉知寛之（サブリーダー）
参加者　47名（U35メンバー含む）
協賛企業
アイカ工業㈱/㈱イトーキ/因幡電機産業㈱/㈱エスウッド/㈱遠藤照明/㈱ABC商会/㈱オカムラ/元旦ビューティ工業㈱/㈱国代耐火工業所/ケイミュー㈱/コイズミ照明㈱/コクヨ㈱/コマニー㈱/㈱サンゲツ/㈱スミノエインテリアプロダクツ/太陽工業㈱/立川ブラインド工業㈱/田島ルーフィング㈱/東芝エレベータ㈱/東リ㈱/日本興業㈱/㈱ニューストー/㈱平田タイル/不二サッシ㈱/フジテック㈱/文化シヤッター㈱/㈱ユニオン/㈱LIXIL/ルノン㈱/YKK AP㈱

U-35委員会インスタグラム開設しています。活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。
https://www.instagram.com/u35.aaj/

●展覧会の概要

これまでU-35委員会（以下U35）が企画・運営してきた、社会に向けたアウトプットとしての「action」は、今回で記念すべき11回目を迎えました。2013年にU35が設立されてから12年が経過し、メンバーは新陳代謝を繰り返しながら、年代としてもひと回りする節目を迎えています。これを契機に、これまでの活動を紹介する展覧会を開催することとしました。

本展覧会のねらいは、日本建築協会およびU35の活動を広く発信し、今後の新たな関係性を広げることにつなげることです。展覧会は、Loftworkが運営するFabCafe Kyotoにて、３月18日から３月22日までの５日間開催しました。開催にあたり、30社の協力会社さんからの協賛をいただいております。

展覧会は、以下の３つのテーマで構成されています。

①日本建築協会 U35 exhibition
②nomadogiとパブリック
③35歳、!!

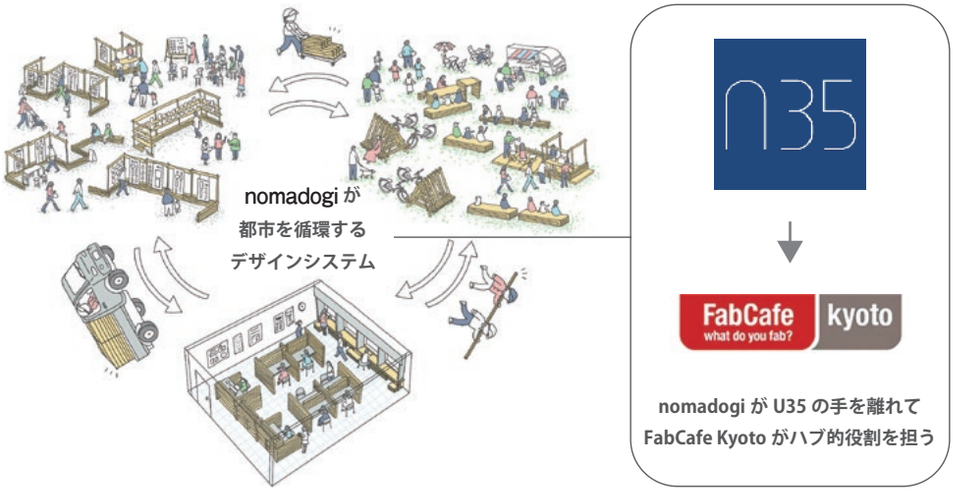
「日本建築協会 U35 exhibition」では、「建築と○○」をテーマにディスカッションを重ねてきた「talk baton」28回分の記録や、街に対するアクションとして実施してきた「action」10回分の記録に加え、これまでの出版物を展示しました。

「nomadogiとパブリック」では、8th action、9th actionにおいて茨木市と協働し、茨木市役所前線の廃道計画地で２回にわたって実施した社会実験の過程で誕生した、2×4材で組み立てる家具ユニット「nomadogi」を紹介しています。社会実験で使用したnomadogiは、昨年度の10th actionにおいて、日本建築協会の事務所改修時の家具としても活用されました。このように、近年のactionはnomadogiを用いた活動が中心となっており、今後nomadogiを活用していくパートナーを探すことも目的として展示を行っています。また、「nomadogiとパブリック」をテーマに議論するトークイベントも開催しました。

「35歳、!!」は、U35という当委員会の名前にある、35歳という年齢について考える企画展示です。35歳は人生におけるさまざまな転換点となる年齢ではないか、という問いを出発点に、「自分は35歳でどうありたいのか」「振り返ってみて35歳はどのような時期だったのか」「同年代の人々は何を考えているのか」といった視点から参加型の展示で構成しています。

５日間の展示期間を通して、建築関係者のみならず、学生や一般の方含めのべ222人、トークイベントは47人の方々に参加いただきました。

展覧会の会場：nomadogiを利用した展示計画



ふしぎラボ in どんぐりの森：イベント風景

テントサウナ：ベンチとして利用

FabCafe展示：nomadogiを床に敷き詰めた展示台

FabCafe展示：展示をnomadogiで立体的に構成

hitotokiに貸し出し：花見をする川床

●nomadogiの自走

nomadogiという名称は、遊牧を意味する「ノマド」と「木」を組み合わせた造語です。誰もが手に入れやすい材料を用い、誰でも簡単に組み立てることができ、かつコンパクトに収納・運搬できることから、都市のさまざまな場所を遊牧するように使われていくことを目指してきました。

これまでnomadogiを活用した活動は、U35が主体となり、イベントの企画・運営を含めて実施してきました。しかし、U35は社外委員会としての活動であるため、nomadogiを継続的に運用するハブ的な役割を担うには限界があると感じるようになりました。そこで、nomadogiがU35の手を離れ、自律的に運用されていく「自走」を目標に、2025年度は活動を進めてきました。

その結果、Loftworkが運営するFabCafe Kyotoが新たなハブとなり、nomadogiを自走的に運用していただける体制が整いました。本展覧会も、FabCafe Kyotoで自走しているnomadogiを借用する、という位置づけで展示を構成しています。

2025年10月にはFabCafe Kyotoへnomadogiを搬入し、FabCafe KyotoのスタッフとU35メンバーで組み立てを行い、自走がスタートしました。その後、FabCafe Kyotoをハブとして、nomadogiはさまざまな場所へと展開されています。2025年11月には、京都府立植物園で開催された「ふしぎラボ in どんぐりの森」において、屋台ブースやベンチといった家具として利用されました。この際、U35は組み立ての立ち合いという立場にとどまり、搬入・設営・撤収はLoftworkが主体となって行っています。さらに、2025年12月から2026年２月にかけては、テントサウナを主催する松山氏にベンチユニットとして貸し出されました。本展覧会後の2026年４月には、西宮市役所職員有志による活動「hitotoki」に貸し出され、夙川での花見を行うための川床や、ジャズライブの観覧席として使用されました。このようにFabCafe Kyotoを中心とし、nomadogiは都市の中を循環しながら、新たな貸し借りの関係性を広げています。

また、FabCafe Kyotoでは日常的に多様な展示が行われており、その中でもnomadogiを用いた展示が実施されています。FabCafe Kyotoと出展者が協働し、nomadogiの新たな使い方を開発するなど、U35の手を離れたからこそ得られた発見も多くありました。nomadogiを床に敷き詰める、最小限の材料で立体的に組む、丸棒に展示作品を吊り下げるなど、出展者の自由なアイディアが展示に反映されています。

このように、nomadogiがU35の手を離れて自走することで、これまで以上に都市の中を循環させることが可能となり、その循環の一連の流れの中に本展覧会を組み込むことができました。本展覧会が、nomadogiを起点とした活動のさらなる展開と、新たなつながりの創出につながる契機となることを期待しています。

（文責：大屋）

■AAJ U35 Exhibition詳細

日本建築協会U35 exhibition

–新陳代謝する組織の12年–

日本建築協会U-35委員会（以下U35）は設立してから継続して２つの活動を行ってきました。１つは建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げるコミュニケーションイベント「talk baton」。若手プラットフォーム作りの一環として、建築をフィールドとするU35メンバーと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていくin-putの活動です。もう一つは、年に１回のペースで社会に対してアクションを起こす「action」。U35メンバー間で共有している「建築と社会」にまつわる問題意識やtalk batonでの気付きに基づき、皆で設定したテーマについて深く掘り下げ、多くの方々と共有し、その価値を広く発信するために開催しているout-putの活動です。

また、近年ではUnder 35 Architects exhbitionとの共同イベントや、U35メンバーと様々な建材メーカーの若手が集い、会社の枠を超えて知見を共有し合う「建築と集合知」の開催、組織で働く若手設計者の実情を描いた『組織設計・ゼネコンで設計者になる』を出版するなど、活動の幅を拡げています。

U-35委員会は12年間で『talk baton』を計28回、『action』を計10回行いました。それらは毎回日本建築協会の会誌『建築と社会』に掲載し記録を積み重ねています。今回の展示ではそれらの記事をハンガーに吊るして一覧に並べ、これまでの活動量を可視化できる展示としました。nomadogiで組み立てた展示ブースは会場の机と一体化することで、Cafe利用者の空間と展示空間が共存し、来場者が自然と展示に触れられることを意図しています。

また、入口のサインについては、寸法の調整を行いやすく、nomadogiとも相性のよい布サインでデザインし、こちらも既存の家具と組み合わせることで、Cafe空間に溶け込んだデザインとしました。

（文責：中野）

nomadogiとパブリック

–ノマディックプレイスメイキング–

nomadogiのスタートは、前項で紹介のあった「action」のうち、2023年実施の「8th action 建築とみち」まで遡ります。「8th action」では茨木市の社会実験を舞台とし、ゾーンを仕切りながら人の居場所とみち空間をつなぐ「ライン」と、フレーム上に組むことで市民活動の小さな拠点となる「ブース」の２パターンを展開することで、パブリック空間における実証実験を行いました。それ以降nomadogiは様々な空間・もの・こと・ひとを介して展開し、より洗練され使い込まれ、U35を代表する簡易型木ユニット家具として親しまれていると思います。

nomadogiはホームセンターでも購入可能な２×４材と40Φの丸棒で構成されています。最小限の金物と組み合わせることで、少ない部材で多様な形を創ることが可能です。組み立ては簡単で穴の開いた２×４材を丸棒に差し込み、積み木のように積み重ね釘を使わず固定が出来る為、誰でも手軽に組み立てをすることができます。

今回のnomadogi展示は、これまでの利用方法や地域への展開・活動の継承をnomadogiを通じて体感できる様なデザインとしました。80案を超えるnomadogiの利用方法を集約した「nomadogiカタログ」はU35メンバーが実際につくった事例や「こんなnomadogiの使い方もあるだろう」といったあっと驚く使い方も含めて取りまとめたものになります。カタログを1枚1枚円環状に天井から吊るし、自然と視線に入る様な展示計画を検討しました。今回取りまとめた80案はnomadogiをこれから利用したい方々や社会へのアピールにもなると考えています。

テーブルの座組はnomadogiによる製作で行い、畳を組み合わせることで、会場になじむデザインとし、イベント時には展示スペースを舞台や客席に容易に転換可能な計画としました。テーブルの上には「mini nomadogi」を設置し、実物の1/12スケールモデルにより、訪れる方々が、各々に発想が生まれる様な空間を目指しました。材料はアクリル板によるものです。FabCafe Kyotoのレーザーカッターを利用し、地産地消的な場の利活用にこだわりました。

nomadogiの語源はノマド＝遊牧民を指し、木材が都市を軽快に移動し、その土地になじむことを目標としたものです。nomadogiの展示空間は、来訪者の心に残りnomadogiの次の舞台へのきっかけとなれば幸いです。

（文責：安達）

U35 布サイン展示（概要紹介）

U35 これまでの活動アーカイブ展示

35歳、!!

–35歳ってなんだ？人生を考える展–

U35は、35歳以下の若手設計者により構成されています。35歳について考えてみると、キャリアの円熟期に入り、結婚や出産、住宅購入といったライフイベントが集中する「人生の様々な転換点となる歳」と言えるのではないでしょうか。今回のAAJ U35 Exhibitionにおいては、社会に揉まれながら成長を実感し、次なる展望を模索する「35歳」を切り口に、人生について考えてみる企画展を実施しました。

展示は、「35歳データベース」「35歳価値観タイプ診断」「私とあの人の35歳アーカイブ」「異業種コラボ掲示板」の４つからなる構成としました。

「35歳データベース」は、仕事においてもプライベートにおいても様々な変化がある35歳について、統計データをもとに分析した展示です。世間一般における35歳と来場者自身の35歳を比較・イメージしながら、自身の人生を振り返り、これから進んでいく道を見出す・再認識するきっかけとなるような展示としています。

「35歳価値観タイプ診断」は35歳における価値観を８つのタイプに分類した、チャート形式の展示です。35歳になっていない人も、35歳を超えている人も、35歳の自分になったつもりで各問いに答えていくと、１つの価値観タイプに分類されます。同じタイプの偉人や友人と比較しながら、来場者自身を知る一つの指標となるような展示としています。

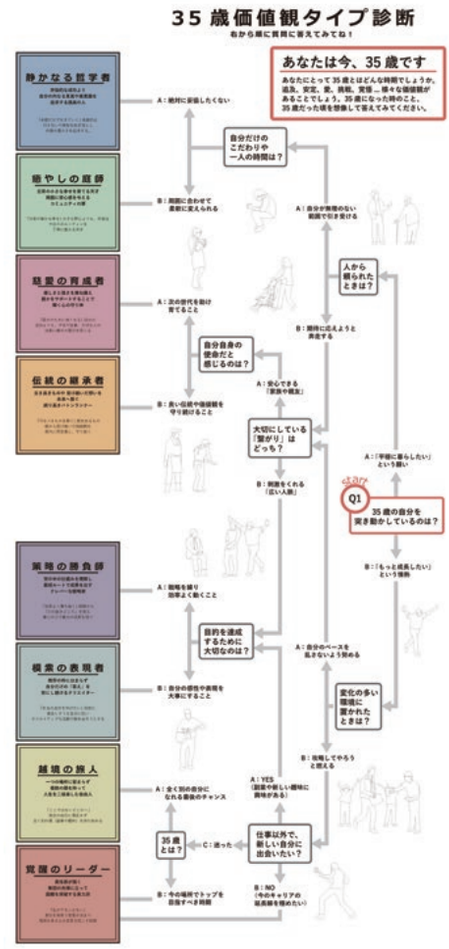
「私とあの人の35歳アーカイブ」は、35歳価値観タイプ診断の結果に応じた色のカードに「35歳とはどんな歳なのか」を来場者自身が考え、記入する参加型の展示です。偉人や友人、先輩、後輩たちは、35歳の時に何を考え、何を成そうとしているのか。8つそれぞれの価値観タイプに分類された様々な人の「35歳とは」を集め、「35歳」について深掘りする展示としました。

35歳以下の設計者で構成された日本建築協会U-35委員会は、talk batonという活動において「建築×〇〇」をテーマにトークセッションを行い、actionにて様々な社会実験などを行っています。そんな私たちと「何か一緒にやってみたいコト」や、建築×〇〇の「〇〇」にあてはめたら面白そうなコト・ヒトを自由に書ける掲示板を設けることで、新しい発見や繋がりをつくるきっかけになればと思い、「35歳、!!」の最後に「異業種コラボ掲示板」を設けています。

今回の企画展示の中で、多くの方に「私とあの人の35歳アーカイブ」に参加いただきました。「35歳とは」という問いに対して、千差万別な回答をいただき、改めて35歳が転換点たる所以を実感するとともに、このアーカイブをきっかけに話がはずみ、友人や先輩後輩の想いに触れることもできました。

設計者としても、35歳は一つの転換点となります。入社して10年程の経験を活かし、建築主の想いと自身の想いを設計に反映させ、これからどのように建築を設計していきたいのかを、どう示すことができるか。35歳は設計人生においても、多様な分岐点になり得る貴重な時期であると感じています。

（文責：三井）



nomadogi

35歳について考える企画展示「35歳、!!」

35歳の自分を見つめ直す「価値観タイプ診断」

■TALK SESSION 3/21実施

本イベント「nomadogiとパブリック-ノマディックプレイスメイキングという考え方-」では、日本建築協会U-35委員会（以下U35）が開発した可変可能なユニット家具「nomadogi」を通して、今後のパブリックスペースの可能性について探るトークイベントを行いました。

前半は、U35およびnomadogiのこれまでの歩みや現在の活動について紹介。また、ゲストスピーカーの皆様からも、それぞれの取り組みや活動についてご紹介いただきました。後半のトークセッションでは、モデレーターとして、木下浩佑氏（FabCafe Kyoto）を交え、建築・都市・場づくりを横断する多様な視点から議論を深めました。

【前半：活動紹介】

1．大屋泰輝（日本建築協会U-35委員会リーダー）

「nomadogi」は、名前の通りノマドという言葉と木という言葉を掛け合わせたものです。ある日はベンチとして使われていたものが、またある日はイベントブースになるなど、形を変えて循環していく。これまでの活動で生み出してきたもの含め、現在は81パターンの形が出来ています。

面白いのは組み立てる過程でも周囲の人を巻き込むことができるところです。京都府立植物園でイベントブースを制作しましたが、私たちが見本を作る横で、園の方々がそれを見ながら自主的にブースを組み立てていただきました。身近な材料で、シンプルなルールで出来ていることで、初めて見た方でも理解しやすく、参画しやすいシステムだと思います。

現在はFabCafe Kyotoを中心にnomadogiの貸し借りの関係ができ始めており、先日はサウナイスとして利用するなど、様々な場所で形を変えて都市を循環しています。

2．山口敬太（京都大学大学院 地球環境学堂 准教授）

私は道路や歩行者空間の設計やマネージメントにも関わっていますが、最近のニーズとして、利用する団体さんが自分たちの手で使いやすくできる「関わりしろ」が求められています。道路にベンチを置いてしまうと風景が固定化しちゃうのですが、固定化した風景よりも、いろいろ変わりうる風景の方がワクワクしますよね。

御堂筋歩行道ユニットのプロジェクトでは、一つのベンチでも道路管理者が受け持ってくれない「木の部分」を民間事業者が管理・占用する、という役割分担を考えました。パブリック側も、こうしたアダプティブに使えるファニチャーを求めています。例えば民間企業がやる気になれば、行政が置くだけではない、もっと自由な活用の可能性が広がっていくと考えています。

3．阿部俊彦（立命館大学 理工学部 准教授）

気仙沼の復興に関わっていた頃、地元民が反対した防潮堤を海と街を繋ぐ場として提案しました。公共事業なので、行政からは「安全のための避難施設として作ってください」と言われます。だから、避難施設ですよと説明しつつ、普段は子供が遊べ、ピクニックやイベントができるよう、デザインしました。公共空間を、目的に対して素直に作りすぎても面白くありません。私は「嘘も方便」を随所に埋め込んでいくことも、物事を円滑に進めるためには許されるんじゃないかと。

nomadogiが素晴らしいのは、「変えられる」ことです。路上で使っていて注意されても、30分後には自転車置き場に変えて「これならいいよね」と。利用者が思い描いたユートピアを、場所をシェアしながら実現していくためのツールになるのではないかと思っています。

4．的場　理（茨木市市民文化部 共創推進課）

茨木市の新施設「おにクル」の前事業のイバラボ広場での取り組みでは、市民の方に参加いただけるハードルの低い空間や、緩やかな運用のあり方を大切にしてきました。スケボー少年たちと一緒にマナー啓発のアイテムを作ったり、市民の遊びに僕ら職員も混ぜてもらったり。毎年「実験」という言葉で逃げながら（笑）、とりあえずやってみて、共感を広げて次の展開につなげていく、ということをやっています。

最近おにクルの管理が行き届きすぎてしまっていると感じており、来年度はおにクルの中で軽やかな屋台を走らせたい。人と繋がれる距離感をもう一度作っていきたいんです。nomadogiのような可変性や、やってみないとわからない「実験」の精神は、非常に参考になるなと感じています。

5．西口健太郎（西宮市役所職員／hitotoki）

普段西宮市役所で働いていますが、今日はhitotokiというサークル活動の話をします。モットーは、「やりたかったからやった」。市役所の仕事はガチガチに真面目なものが多いので、ちょっとでも楽しくできたらと思って始めました。

最初は自作の椅子や卓球台を作って街に出したのですが、失敗も多く、「外で卓球はできない」と作ってから気づいたり（笑）。でも、民間の中に公共の機能が入っていくような、逆転の発想にワクワクしています。再来週は、nomadogiをお借りして夙川で「勝手に」川床をやります。まずは自分たちが楽しむことで、街との新しい関わりを作っていきたいです。

【後半：トークセッション】

木下　先生方のお話を伺っていて、やはり「可変性」というところが、単に「仮設物を作る」ということではなく、「固定化させない」と山口先生がおっしゃっていたり。また阿部先生がおっしゃっていた「目的外の使用」や「嘘も方便」という言葉をなるほどなと思って聞いておりました。公共の目的に管理されたものにするのではなく、「関わりしろ」にするということをおっしゃっていたかと思います。

あとは、西口さんのお話を伺いながら今の話と繋がって、「勝手」という言葉がメインのキーワードかなと思っております。勝手にその活動をできるようにしているという点と、的場さんが「おにクル」の話でされていた「自由に使えるようにするためのルールメイキング」といったお話。それもある種の「勝手」ではあるのですが、体制が整ってくると、勝手にする余地が少なくなっていくのがむしろ今の課題かもしれませんとおっしゃっていました。この「勝手に」という話や、可変性と呼んでいるものの捉え方を、今日のメインテーマにできたらと考えています。

私たちが運営しているこの場所でも、どんな目的の方が何をしていても良いのがカフェという場所の考え方だと思い、お店をオープンにしています。カフェ営業中にコーヒーを飲んでいらっしゃる方がいる時も、nomadogiのような展示が急に現れては、次に来たらなくなっている。そうすると座席が減ったり増えたりするのですが、来られた方に「そこ座れますか？」と聞かれながら展示物の置かれたお座敷をご案内したり、後ろでは誰かがレーザーカッターを使ってものを作っていたりします。結構その「勝手に」ということと、他の人が何をやっているか分からないけれど場所を共有している、といったことがよく起こっています。

木下浩佑／FabCafe Kyotoブランドマネージャー

そういう場所でこのnomadogiを置いていると、最初は作っていただいたものをそのまま使っていましたが、我々スタッフが勝手に切り替えたり、展示しに来た人が勝手に板を敷くだけで使うといった新しい使われ方が生まれていたりもします。そのあたりの実践している内容も含めて、少しお伝えしながら進められればと思います。

大屋　「勝手に」というキーワードがすごく面白いなと思いました。U35でこのnomadogiの形を作って、イベント等に合わせて事前に計画を進めていくものの、大体は現場レベルで形を大きく変えたりしてその場で最適な形を考え直して誰かが勝手に調整しています。nomadogiはそういった「勝手に」を実現できる、即座に組み方を変えれる柔らかさのようなものがあると感じています。そういった柔軟なシステムや体制が他のみなさんのお話を聞いていても共通して重要なのかなと思います。

大屋泰輝／日本建築協会U-35委員会

倉知　皆さんの活動紹介を聞いて、パブリックスペースを運用するときや、何か物事を起こすときには、やはりリスクやハードルがネックとなり一歩踏み出しにくい、という点が共通の課題なのだなと思いました。皆さんそれぞれの立場でハードルを超える方法を考えられてきた実践を興味深くお聞きしましたが、共通して、あるハードルを乗り越えるときの後押しとなる存在が求められているなと感じました。皆さん最後にnomadogiの良さについてコメントして頂きましたが、nomadogiはそれ自体が素晴らしいものだというよりも、パブリックスペースを運用する際のハードルを越えるための後押しとなる要素を兼ね備えているのだなと、自分の中で整理ができました。僕たちは建築設計の仕事をしていますが、建築というフィールドでは扱う金額も大きかったり、使い方の設定があったりなど、空間の運用という点では融通を利かせづらい状況が多くあります。その分強さがあることが魅力ではあるものの、ストック型社会でこれからのパブリックスペースを作る上で求められているのは「少しこんなことを試してみたい」と思ったときに後押ししてくれるような存在なのかなと思いました。

倉知寛之／日本建築協会U-35委員会

市川　今日お話いただいた茨木市さんや西宮市さんは普通の行政マンではなかなか出会えないというのが直感です。制度上判断が難しいグレーなところ、そういったところにとことん付き合ってやってみようという方がいること自体が、すごい価値なのだと思います。

私は竹中工務店設計部に所属していまして、「おにクル」で的場さんと一緒にプロジェクトを担当させていただきました。事業者の目線で言うと、おにクルを設計する時に「イバラボ広場」という実験広場が目の前にある状態で設計がスタートしました。そうすると設計者は、イバラボ広場でルールを柔軟に変えながら使っている様子を見せてもらいながら設計ができる。これは非常に恵まれたことだと思いました。設計者も手が止まらなくなるんです。「こんな自由な行政だったら、これも許してくれるんじゃないか」とどんどん積極的に提案したくなる。それはまさに、設計者や事業者が、行政の方に後押しされて設計する環境があるということです。

普段は「設計をしてから運用する」という一つの流れがあるのですが、そうではなく、手前に柔軟な試みがあることで事業者が入りやすくなる。そういう時系列でプロジェクトを進めていくのも非常に良いのではないかと感じております。

山口　お話を伺いながら、やはり「関わりしろ」があるというのが、すごく大きな可能性があるなということでした。自分たちの手で

作れる、あるいは組み立てられるとなった瞬間に、自分たちの関わり方が全く変わってくる。今まで誰かに「発注」してお願いせざるを得なかったところから、「自分たちで考えてもいいんだ」「やってみてもいいんだ」と思えるようになると、社会実験の在り方そのものが変わり、主体性を引き出すことができるのではないかと。そうした「関わり方」と「しっかり感」のバランスをどう取られたのかをお聞きしたいです。もう一つが交換できるのがメリットだと思い、部材が規格化されていることで、部分的更新や追加ができる。保管場所も分散できると思うので、どれだからどれという使い方がない、インフラみたいなかんじも素晴らしいと思いました。

山口敬太／京都大学大学院 地球環境学堂 准教授

倉知　そもそも建築設計の仕事はしっかり側に寄っています。作ることと考えることが分業化・専門化されていて、専門外の関わりしろが少ないと思うところがあります。nomadogiの組み方は「校倉造り」や「屏風」などの伝統的な組む技術を参照しているのですが、そうした「組む」という専門技術を穴に棒を通して積むだけのディテールに簡素化しています。ものづくりは一人ではできないものですが、ものづくりに内在する協力関係を、nomadogiでは「組む」技術を簡素なあり方に変えることで、専門外に関わりしろを開く試みをしているのかなと考えています。そうして関わりしろとしっかり感のバランスが自ずと取れたのかもしれません。

市川　冷静になってみると、そういう思想で作ったという面もありますが、最初は茨木の道路の社会実験ですぐに片付けなければならなかったり、平日は駐輪場として、休日は別の用途としてニーズがあったり。短時間で切り替えるにはどうすればいいかとなった時に、2×4材に丸穴を開けておき、そこに丸棒を差せば、みんなで一気に移動できる。そうした社会実験ならではのリアルな課題を解決していった結果でもあります。

木下　「しっかりした部分」が、実は我々の場所で使う時に効いていたと思います。この部材だけを渡されて「ご自由にどうぞ」と言われると、不安で使えないのですが、建築をされているU35のみなさんが実際に作ってくださって、それを見たり触れたりする経験があると、その後に関わりしろが増えたと感じていました。大屋さんが最初にお話しされた植物園の例もそうで、最初ただ積んである状態だと少し手が出にくい。ですので、物だけでなく「誰が最初に何を作るか」も重要だと思いました。

阿部　さきほどの「勝手に使う」という話ですが、ただ勝手に使っているだけでは不十分で、nomadogiはまずデザインが格好いい。共感を得られるというか、誰かがこれを使って置いているのを、格好悪くて邪魔だったらどかしたいわけです。ですが、デザインがしっかりしていて格好いいというのは、共感を生むのだと思います。

伝統技術を踏まえた上でモダンなデザインにしていく。使い方も、カタログやブックもおしゃれですよね。「こういう使い方をすると格好よく使える」ということを示しているのは重要で、そこがポイントなのかなと思っています。

阿部俊彦／立命館大学 理工学部 准教授

西口　大学のアトリウムなどにこれが並んでいたら、すごく楽しいと思うんですよね。

阿部　設計に組み込むのは、図面に書いてしまえばいいなど、テクニックは色々ありそうですが、カスタマイズできる余地を作っていく方向へ向かうことが、一つの設計のあり方だと言えるのではないかと思います。

木下　これについて、答えにくいこともあるかもしれませんが、公務員のお二人は「動かせない」「やってはいけない」という制約の中で、現場だけじゃなくて仕組みに対してどう働きかけるか、ということをやっていらっしゃるかと思います。予算の問題や位置づけの難しさなど。また、U35メンバーの方は設計者の立場で、本業の中ですぐに実践するのが難しい理由など、仕事抜きでお話しできればと思います。

西口健太郎／西宮市役所職員・hitotoki

大屋　建物が基本動かないものを設計するっていうのもありますが、安全性を優先する面がありますよね。例えば棚を一つ作るにしても、見たことのない材料を使おうとすると「本当に大丈夫なのか」と一つずつ紐解く必要があります。イケフェスを契機として、大林組では会社にnomadogiを置くことになりましたが、カウンターやベンチなど実物を通して実際に運用していくことで、こういった安全面に対する理解が少しずつ生まれてきていると感じます。現在は活動の蓄積ができてきて、カタログやブックなどの発信ツールも整ってきたので、そういった実績ベースで発信していくことが使う人の理解につながると考えています。

的場　茨木市で行ったストリートアクションの社会実験の際は、道路の許認可などを取りに行く担当は別にいて、自分は横で聞いていたので、道路での活動は「難しそうだな」となんとなく思っていました。おにクルは、館内の共用部分を小規模からでもイベントや活動に使える全国的にも珍しい施設になっています。かなり幅広い使い方を既にしているので、nomadogiなどを置いてみることに関しても、むしろ外より柔軟に試すことができます。「実験」という言葉を多用してはいますが、とりあえずやってみることで景色づくりや共感につながり、何かが起きるんじゃないかと考えています。

3年後どうなっているかは分かりませんが、来年度は館内に屋台を置いてみて、人の

流れや滞留、繋がりの生まれ方を見てみたい。「共感」「これいいね」というポジティブな声が広がっていけば、予算の話も含めて進めやすくなると思います。また、今日この場にあるnomadogiのカタログや模型などイメージしやすいモノがあれば、ワークショップに活用できたり一般の方にも伝わりやすいと思います。

的場　理／茨木市市民文化部 共創推進課

西口　建築や設計の方が思っているよりも、一般の人はそこまで気にしていないのではないか、というのが役所側の人間としての感覚です。私のような建築職の人間だと「大丈夫なのか」といった硬い話になりがちですが、現場の人たちは「建築協会が作ったの？」「どこでもやっているから大丈夫」といった感じではないでしょうか。そこに広い可能性があると感じました。

さきほど先生がおっしゃった「変えられる」という点も、形だけでなく、傷んだ時に部材を新しくできる、色々な人が持ち寄れるというのがnomadogiの良いところです。それを建築のプロセスに組み込もうとすると途端に難しくなるので、何か別の形で進める方が良いのではないかと思いました。

木下　例えば「共創空間」という名前の多目的な場所を作っておいて、そこをきっちり作り込まずに余白の多い場所にする。そこで必要なものを、運営計画の予算の中で提案していくといった形がよいのではないかと思います。そうすれば発注も一括で予算化できて合理的ですよね。現場運用の方も、最初に形がFIXされるとこの家具は邪魔だなと思うこともあるので、可動性やメンテナンス性の面でも非常に良いということを売りにしていける気がします。

市川　日本建築協会も一般社団法人のため、委員会活動も、利益を目的とした団体ではありません。現状ではU35メンバーの交通費程度を賄いながら動けるようにしています。それ以外は原価と加工費で、2×4材1本が700〜800円、丸棒が3000円程度。加工も単純な工程なので、この仕様ですぐに加工に入れるようなパートナーをその都度探している状況です。このようにコストを最小限に抑えながら活動してきた一方で、我々の思想としては海外産の2×4材ではなく、国産材で行いたいという思いもあります。木の循環と地域の循環を結びつけることは、次の狙いどころだと考えています。

木下　コストを抑えつつも、「誰かの完全所有ではなく共有できるというルールに乗る必要がある」といったお話もありましたよね。

市川　おっしゃる通りです。最初に200本まとめて予算をつけるのは難しいですが、30本だけ用意し、足りない分は他から借りる、といった使い方ができます。この貸し借りの関係が大事だと思っています。材料が都市の中に滞留し、多くの場所を回っていて、使いたい人がその時々に集めて活用する。「共同所有」という考え方が大事なのだと思います。

市川雅也／日本建築協会U-35委員会

木下　会場のみなさんも、何か質問や感想はありますか。

参加者（大東市テントサウナで利用いただいた松山さん）　昨年12月のイベントでnomadogiを使わせていただきました。どうしても化石燃料由来のプラスチックの椅子を使いたくなくて、でも自分では作る技術がなかったのですが、これを見た瞬間に「これなら作れる」と思いました。板だけでは想像できませんでしたが、FabCafe Kyoto内の展示があったからこそ使い方がよく分かりました。木の温もりと香りが非常に良く、座り心地も良かったです。今後は椅子だけでなく、屋台の風景がこのnomadogiで埋め尽くされるようなイベントができたらいいなと思っています。

木下　では、最後にこれからnomadogiで今後こんなことできたらいいなと思うことをお聞きしたいです。

阿部　nomadogiを普及させることは、それ以上に「哲学的なことを考えさせられる」という点に大きな可能性があると思います。身近な家具や什器への気づきを与えることもあるでしょう。建築家がかつて考えていたシステムを、社会に対して働きかけるための「ツール」として、私は使っていきたいなと思っています。

山口　プロダクト的なシステムとしてだけでなく、例えば子供たちや市民の「都市空間を使いこなすリテラシー」を高めるインフラとしての可能性があると感じています。社会運動的な側面こそが、建築と社会を繋げる方向になるのではないかと思いました。

大屋　茨木の社会実験に対応できる什器を考えることからスタートしましたが、そこで利用した木材は様々な場所に循環させて利用することで、ここまで活動の幅を広げることができました。今年度はU35の手から離れて自走することを目指し、FabCafe Kyotoさんをハブにnomadogiを運用していただきましたが、今後も様々場所を起点に活動の幅が広げられればと思います。

指田（協会会長）　今日は「nomadogi」がパブリックスペースのアクティビティを向上させる装置としての可能性を強く感じました。デジタル世界のオープンソースのように、一定のルールを作って活用できる仕組みができれば、私たち日本建築協会の理念である「建築を通じて社会に貢献する」ことの、新しい形になるはずです。日本建築協会は建築に関わる領域を超えた様々な方々が集まった団体ですが、この領域を超えたつながりから今後も様々な活動を展開できればと思います。本日はありがとうございました。

（文責：平田）

※記載の所属や肩書等は開催時点のものです

■展覧会・トークイベントを振り返って

●nomadogiがつくる建築と社会の新しい循環

U35でのここ数年の活動は、ノマドギを介して建築と社会の関係を少しずつ編み直していくプロセスだったように思う。実践を重ねるたびに、活動の意味が上書きされていく。そうしたU35でのスパイラルアップの活動過程において、今回の展覧会・トークイベントでは「パブリック」という切り口から改めてnomadogiやU35の活動の可能性を捉え直すことができた。

nomadogiは、社会実験やイベントで見慣れた「単管＋テント」などの仮設風景のオルタナティブとして考えたものである。都市の中に、ものづくりを介した楽しげな風景や協力関係が循環していくことを目指してきた。ディテールは、丸穴に棒を通し材を積み重ねるだけで機能や意匠を多様に変化させることができるようになっている。「組む」技術を最大限に単純化したオープンな工法とすることで、スペースづくりにおいて多くの人が関われる余白をつくる。考えることとつくることが分業化・専門化しているものづくりに内在する協力関係を社会へ開く試みだ。

現在ではFabCafe Kyotoでの常設運用を皮切りに、希望者への貸出しや外部イベントでの活用など、社会実装を進めつつある。今回の展覧会・トークイベントは、nomadogiを中心としたこれまでの活動が「パブリック」や「社会」へと接続していることを実感する機会となった。

●「融通性」がひらく公共空間の可能性

トークイベントでは、パブリックスペースをつくる上でのポイントについて多くの示唆を得た。ここでは、議論に挙がったいくつかのキーワードを手がかりにしながら、これからの公共空間の可能性を切り開くものは何か、について考えてみたい。

・「関わりしろ」が主体性を喚起する

公共空間は、行政が一方的に整備するだけでは十分に機能しない。むしろ、民間や地域の人々が気軽に関われる余白が、場づくりの主体性を喚起し、都市空間を活性化させる。完全自由の余白ではなく、少し手の入った部分や規格化されている部分がガイドとなることで、関わりやすさがドライブする。

・「目的外使用」が都市を豊かにする

本来の用途に限定されない、多機能で多義的なものが自由な使い方を促す。制度や計画の中に、「嘘も方便」を許容する余白があると見立て、プレイヤー側から設定に縛られない使い方を見せることで、都市空間の自由度を高めることができる。

・「実験精神」、「勝手に」が都市へ切り込む

「まずは小さく試してみる」ための環境も必要だ。公共空間には予算やルールなど多くの制約が存在する一方で、行政側もより柔軟に街と関わる方法を模索している。低コストで手軽に扱え、「実験精神」を支える存在、「勝手に」を後押しする存在があれば、人と街との関係を探るスタディはもっと豊かになる。公共空間に必要なのは、人の主体性を喚起し、多義的に振舞い、一歩踏み出すハードルを下げる「融通性」のある存在なのだと感じた。

ここでの「融通性」とは、状況に応じて姿を変える適応可能性（Adaptability）、多様な主体を受け入れる柔軟性（Flexibility）、そして複数の役割を横断できる多才性（Versatility）を含んだ言葉として捉えている。nomadogiは手軽で、安価で、多機能で、協力し合えば一つの大きな空間もつくれるなど、ファニチャーに留まらず建築や広場にまで応えるスケールの振れ幅もある。まさに議論に挙がったポイントを網羅する「融通性」を表象する存在として、公共空間に求められる条件にフィットする。

一方でシステムとしての完成度だけでなく、共感を生むデザインになっていることが前提として重要となる。循環型社会の文脈で見れば、nomadogiは資源の再利用やシェアの観点から、“正しい”システムと言える。しかしそれ以上に着目すべきは、融通を利かせ、あらゆる状況で手軽に場づくりを進めながら、その姿が共感を広げることで、人と人、都市と人との関係が醸成される点にあるのだと思う。

どのような場所にするか一緒に考えながら対話ができること。材料を貸し借りすれば様々なスケールの場づくりに適応できること。協働した結果が形に現れること。それらが手軽に・勝手にサイクルし、人や都市の間に関係が立ち上がっていくのである。

現代都市では、お金やサービスによって関係が代替される場面が多い。しかし本来、都市の豊かさは、人間が小さな協力を重ねながら関係を築いていくことの中にあったはずだ。「融通性」のある存在が、共感を広げ協力関係が循環することで、社会は少しずつ切り開かれていくのではないかと思う。

●設計職能の広がり

以上のように振り返る中で、設計者が社会にできることの広がりについても考えさせられた。建築物をつくることを通してだけでなく、「プロジェクト未満」の段階でも設計の職能が人や都市の間の関係にアプローチできる余地がある。実際にU35各メンバーの業務におけるクライアントからの要望がきっかけとなり、nomadogiによる場づくりが行われたケースも生まれている。まだ建築の与件化がされていない小さな要望や都市への関心に対して、可変的なプロダクトや小さな場づくりを行いながら、クライアントや社会との対話を始めることができる。nomadogiのような存在を介することで、設計者は建築をつくるだけでなく、もっと軽やかに人や都市、社会の要望に寄り添うことができる。建築を通じて社会に貢献する設計者の新しい役割が見えてくる。

●協力が循環する社会へ

今後は、nomadogiの考えを守りつつ、より共感性を高めるためにnomadogiの意匠登録や商標登録、より大きなエコロジーとの接続を目指しての木の国産材化、アクセシビリティをより高いものとするための発注・制作プロセスのデジタル化などを検討している。nomadogi自体やnomadogiを介しての設計者の役割を、さらに社会へ拓いていきたいと考えている。

最近では、FabCafe Kyotoをハブにしながら、nomadogiの貸し借りや空間づくりの協働の関係も生まれ始めている。場づくりを考える者同士がつながり、都市の中に小さな“nomadogiコモンズ”ができつつある。目指しているのは、単なる製品の普及やサービスの提供ではなく、「協力して関係をつくる文化」の形成だ。これからの人間と都市、社会のために設計者ができることを考え続けていきたい。

（文責：倉知）